

ドブロフスキーとスラヴ学¹ —スラヴ学の勃興と衰退?—

石川 達夫

はじめに

日本におけるスラヴ学の礎を築いた木村彰一教授生誕百年に当たって、そもそも「スラヴ学の創始者」と言われるチェコのスラヴ学者ヨゼフ・ドブロフスキー（1753-1829）を回顧し、ドブロフスキーはスラヴ学をいかなる学問として「創始」したのか、そしてその学問がその後どのような方向に向かっていったのかを確認することは意味のあることであろう。

この小文では、まずスラヴ学の創始者としてのドブロフスキーがどのような人物なのか、その生涯と仕事について概観した上で、ドブロフスキー以後のスラヴ学の発展傾向について若干考えてみたい。そうすると、先回りして述べておくなら、ドブロフスキー的なスラヴ学というのは、実は衰退に向かってきたのではないかという疑問が生じるのである。この疑問について考えることは、実はスラヴ学とは一体何なのかを考えることにも繋がるであろう。つまり、ドブロフスキー的な概念のスラヴ学は確かに衰退してきたかもしれないが、別の概念のスラヴ学は衰退に向かっていないと言えるかもしれないのである。

この小文が、スラヴ学とは何なのかについてもう一度考え直すきっかけとなれば幸いである。

1. ドブロフスキーの生涯と仕事

まず、ドブロフスキーの生涯と仕事について、その概略を見ておきたい。これも逆説的なことなのだが、「スラヴ学の創始者」と言われるドブロフスキーは、実は我々、今日のスラヴ研究者にとってはかなり近寄りがたい存在なのである。

本稿の末尾に掲げたドブロフスキーの年代順著作一覧を少し眺めてみただけでも、なぜドブロフスキーが今日のスラヴ研究者にとって近寄りがたい存在なのかが分かるであろう。つまり、ドブロフスキーはほとんどすべての著作をドイツ語とラテン語で執筆していて、スラヴ語（チェコ語）で執筆したものは、最晩年の 1827 年から 28 年にかけて書かれ

¹ 本稿は、2012 年 6 月 23 日に東京大学本郷キャンパスで行われた日本スラヴ学研究会のシンポジウム「スラヴ学の礎を築いた人々」における発表に手を加えたものである。

た数点のチェコ語の著作くらいなのである。具体的には、著作一覧の 72, 73, 74, 77 の著作がチェコ語で書かれているが、これらはすべてチェコ語版の『ボヘミア愛郷博物館協会雑誌』に寄せた短い著作にすぎない。

ドブロフスキーは、チェコ語を学問の言語として使うべきでないとさえ主張した。それもあって、啓蒙主義的なドブロフスキーに続いたロマン主義的なヨゼフ・ユングマン（1773-1847）などのスラヴ学者たちからは、「スラヴ学に耽るドイツ人」などとなじられもした。

しかしながら、ドブロフスキーがドイツ人だとか、あるいはチェコ人だとか断定することには、あまり意味がないと思われる。なぜなら、「何人か？」という問いに対する答えは、どのような基準で「チェコ人」や「ドイツ人」を規定するかによって異なってくるからである。ドブロフスキーは、近代ナショナリズムがチェコ人とドイツ人をはっきりと区別するようになる以前の人間であったということを念頭においておく必要がある。

ドブロフスキーがほとんどの著作をドイツ語とラテン語で執筆したのは、ドブロフスキーが「スラヴ学に耽るドイツ人」であったからと言うよりも、主として、当時のチェコ語が高度な学問の言葉として使用できる状態になかったからである。世界的にその名を知られるチェコの宗教改革者ヤン・フス（1371 頃-1415）から思想家ヤン・アーモス・コメンスキー（1592-1670）の時代にかけて、つまり中世からルネサンス、バロック初期の時代まで高度な文語に発展したチェコ語は、その後 17 世紀後半から 18 世紀前半にかけての対抗宗教改革期に急激に衰退してしまい、チェコ人ももっぱらラテン語とドイツ語で文章を書くようになり、チェコ語を読む者も急激に減ってしまった。² ドブロフスキーが自分の時代の広範な学問の言葉であったラテン語やドイツ語で書いたからこそ、その著作はゲーテを始めとしてヨーロッパの広範な知識層に読まれるようになり、学者としての彼の真価が広く認められるようになったのである。もしもドブロフスキーがこの時代にあえてチェコ語で自分の学問的著作を書いていたとしたら、そもそもそれを読む者もごく僅かだったのであろうし、ドブロフスキーは「スラヴ学の創始者」としての名声を勝ち得るには至らなかったかもしれない。

これも逆説的なことなのだが、ドブロフスキーが今日のスラヴ研究者にとって近寄りがたい存在になったのは、ラテン語やドイツ語を用いて行ったドブロフスキーの初期のスラヴ学的な仕事の実りをもたらして、チェコ語なりスロヴァキア語なりの近代的なスラヴ文語が確立され、それらのスラヴ文語を用いて学問研究を行うことができるようになったからなのである。つまり、ドブロフスキーの仕事は、彼の研究がもうあまり読まれないよう

² この間の事情について詳しくは、拙著『チェコ民族再生運動——多様性の擁護、あるいは小民族の存在論』（岩波書店、2010 年）参照。

になるような成果をもたらした、と言えなくもないわけである。

さて、ドブロフスキーは 1753 年、農民出身の軍人を父として、父の勤務地であったハンガリーに生まれた。³ 生後まもなく、家族はボヘミア西部のドイツ化していた町に転居し、ようやく 9 歳の時にチェコ人の町のギムナジウムに入り、ここでチェコ語を覚えたと言われる。その後、啓蒙主義的な教授たちが教えていたプラハ大学の哲学部で学んだ。貧しい大学生の通例で、ドブロフスキーは聖職者になろうとし、プラハで一年間学んだ後、ブルノのイエズス会の学寮に入った。しかし、翌年の 1773 年にローマ教皇の命令によってイエズス会が廃止されたため、再びプラハに戻って勉学を続けた。こうしてドブロフスキーはラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語などを修得したほか、文献学や哲学の素養を身につけた。

そして 1776 年からプラハの大貴族ノスティツ家の家庭教師となり、そこで同じく家庭教師をしていた年長の歴史家で、後にプラハ大学チェコ語・チェコ文学講座初代教授に就任したフランツ・マルチン・ペルツル (1734-1801) と接するようになった。ドブロフスキーはそれまでスラヴ語には特に関心を惹かれていなかったのだが、ペルツルらの影響もあってチェコ語とチェコの歴史とスラヴ諸語に関心を向けるようになった。

ドブロフスキーが 1777 年に最初に公刊した共著の著作は、著作一覧 1 の「ヘブライ語手稿のプラハ断片」、翌 1778 年に公刊した最初の単著の著書は、著作一覧 2 の『直筆と言われている聖マルコ福音書プラハ断片』で、前者はドイツ語、後者はラテン語で書かれた。

この最初の二つの著作から、ドブロフスキーの基本的方向性が分かる。すなわち、文献学的なテキスト批判と、啓蒙主義的な迷信批判とが結びついているのである。後にドブロフスキーは、チェコ史を批判的に再検討した自らの一連の著作に『古いチェコの歴史から後世の虚構を取り除く批判的試み』(1803-19 年、ドイツ語) という名称を付けているが、この名称にも学者としてのドブロフスキーの基本的性格がよく表れていると言える。スラヴ学的な著作においても、ドブロフスキーは啓蒙主義的な批判精神をいかに発揮したのである。

ドブロフスキーの生涯において一つの転機になったのが、1792 年に皇帝レオポルト二世 (在位 1790-92) の前で行なった、チェコ語を擁護するスピーチであった。啓蒙専制君主として有名な、しかしながら同時に強硬な中央集権主義とドイツ化政策で知られるヨーゼフ二世の死後、オーストリア皇帝となったレオポルト二世が戴冠式のためにプラハにやって来た。その際、「チェコ王国科学協会」の集会にレオポルト二世が臨席したのだが、

³ 以下、ドブロフスキーの生涯については、特に Milan Machovec, *Josef Dobrovský* (Praha: Akropolis, 2004) を参照した。なお、ドブロフスキーについてより詳しくは、拙著『マサリクとチェコの精神——アイデンティティと自律性を求めて』(成文社, 1995 年) 第 6 章「ヨゼフ・ドブロフスキーとヨゼフ・ユングマン」を参照。

この協会の共同創設者であり書記であったドブロフスキーは、そこでオーストリア皇帝に対するチェコ人の忠誠を約束しつつも、中央政府のドイツ化政策に対してチェコ語を擁護するスピーチを行ない、レオポルト二世にチェコ語を守ってくれるように訴えた。このスピーチは同年にドイツ語の本として出版され、翌 1792 年にチェコ語訳で新聞に掲載された（著作一覧 23）。このスピーチによってドブロフスキーは、対抗宗教改革時代に衰退したチェコ語とチェコ文化を再生させようとする「チェコ民族再生運動」と呼ばれる運動のスポークスマン的な存在になった。こうして、スラヴ語とは特に関係のない文献学者として出発したドブロフスキーは、「チェコ民族再生運動」と結びつきながら自らのスラヴ学的研究を推し進めていったのである。

このスピーチはもう一つ、思わぬ成果をもたらした。レオポルト二世は「チェコ王国科学協会」に 6,000 ズラティーという多額の賜金を与え、「チェコ王国科学協会」はその中から 1,000 ズラティーをドブロフスキーに外国への調査旅行の資金として給付したのである。ドブロフスキーはこの資金を使ってスウェーデンのほかロシアにも赴き、サンクト・ペテルブルグとモスクワに併せて 5 ヶ月足らず滞在し、図書館やアルヒーフで資料を調べた。この調査旅行はドブロフスキーのスラヴ学的研究にとって重要なものになり、後にドブロフスキーは、「ロシア語とチェコ語の比較」（1796 年、著作一覧 33）という著作や、ロシア語文法も書いている（著作一覧 54）。

一般的に言って、18 世紀後半から始まった「チェコ民族再生運動」期においては、歴史学と並行するようにチェコ語についての言語学的研究が進められたのだが、ドブロフスキーも 1809 年に『詳解チェコ語文法』を著した（著作一覧 47）。この著作においてドブロフスキーは、チェコ語の体系を確定する際に、チェコ語以外のスラヴ語、とりわけ古代教会スラヴ語を参照し、比較するという方法を用いた。そして、1822 年には『古代教会スラヴ語の基礎』という本もウィーンで出版した（著作一覧 55）。このようにしてドブロフスキーは、その研究の射程を古代教会スラヴ語も含めたスラヴ諸語一般の研究にまで広げ、1791 年には「スラヴ語、とりわけチェコ語の起源と創造について」（ドイツ語）（著作一覧 24）、1813 年には「スラヴ諸語の全般的語源学案」（ドイツ語）（著作一覧 49）といったスラヴ学的な研究を発表した。さらに、ドイツの少数民族ソルブ人と交流して、1828 年頃には『ソルブ語文法』も書いた。ドブロフスキーが「スラヴ学の創始者」と呼ばれるゆえんである。ただし、『ソルブ語文法』に関しては、残念ながら、ドブロフスキーが晩年に襲われるようになった精神錯乱の中で原稿を破棄してしまったという。

チェコ語研究は全く自然なことに、チェコ語を用いた文学についての研究と結びつき、ドブロフスキーは、ドイツ語で書いた『チェコ語とチェコ文学の歴史』（1792 年）（著作一覧 25）などの文学史的な著作も書いた。その際、この著作が初めは『チェコ語の歴史』と名づけられていたことに示唆されているように、この文学史的著作の「真の主人公」は

チェコ語なのである。この『チェコ語とチェコ文学の歴史』という著作は編年体で記述された最初の文学史であり、そこではチェコ語がその発展ないし衰退において跡づけられており、ドブロフスキーにとってチェコ文学はチェコ語の運命を研究するための手段であったと言われる。⁴ ドブロフスキーはまた、「チェコの作詩法（韻律論）」（1795 年）（著作一覧 27）といった、言語学を基礎とした韻文研究も著している。

チェコ語とチェコ文学の研究は、やはり自然なことに、生きたチェコ語の豊かな実例を提供している民衆の言語文化、すなわちフォークロアへの関心とも結びつき、ドブロフスキーは『チェコ俚諺集』（1804 年、アントニーン・ピシェリとの共著）なども著した。また、スラヴ人の埋葬方法や故地について研究した考古学的研究も著した（著作一覧 16, 20 など）。また、『スラヴィーン』（1806 年）と『スロヴァンカ』（第 1 巻 1814 年、第 2 巻 1815 年）という、スラヴ語・スラヴ文学論集も編纂した（著作一覧 44, 50）。

以上見てきたように、「スラヴ学の創始者」と言われるドブロフスキーの仕事は、初期の文献学的テキスト批判から、チェコ史学、チェコ語学とスラヴ言語学、チェコ文学研究、民俗学、考古学に至るまで、多岐にわたっている。

2. ドブロフスキー以後のスラヴ学の発展傾向

ところで、こうして「チェコ民族再生運動」と結びついてドブロフスキーが推し進めた、言語学を基礎としたスラヴ学は、その後スロヴァキア出身で「チェコ民族再生運動」に参加した汎スラヴ主義的なスラヴ学者シャファジークなどによって発展させられた。つまり、チェコにおいて「チェコ民族再生運動」と結びついて勃興したスラヴ学は、さらにイデオロギー的に汎スラヴ主義と結びついて発展していったという面があるのである。

しかしながら、その後チェコ語なりスロヴァキア語なりのそれぞれのスラヴ語の標準語が確立し、同時に各スラヴ民族の民族的アイデンティティが確立し、汎スラヴ主義的イデオロギーも衰退してくると、スラヴ学は次第に個々のスラヴ語やスラヴ文学などの個別的研究に分解していった。

このような傾向に対しては、既に 19 世紀後半に、ウィーン・スラヴ学派を代表するスラヴ学者と言われるクロアチア人のヴァトロスラフ・ヤギッチ（1838-1923）が警鐘を鳴らしていた。ヤギッチは、一つの全体としてのスラヴ人についての特別で統一的な学問分野としての文献学的なスラヴ学が、個々のスラヴ諸民族の言語や文学への関心によってますます損なわれ、ますますより新しい現代の発展に関心が向けられるようになっていくことを見て取り、このような特殊化の仕方はスラヴ学の統一的な概念を脅かすものだと

⁴ Felix Vodička et al., *Dějiny české literatury II: Literatura národního obrození* (Praha: Akademie, 1960), p. 113.

考え、スラヴ学は道に迷わないためには改革される必要があると主張した。彼は特に、チェコ語古語辞典の編纂者であり著名なチェコ語学者であるヤン・ゲバウエル（1838-1907）とその弟子たちのチェコ学的特殊化にこのような離脱的傾向を見て取った。⁵

他方、ロシアの汎スラヴ主義的なスラヴ学者ヴラヂーミル・イワーノヴィチ・ラマーンスキー（1833-1914）やアントン・セミョーノヴィチ・ブヂローヴィチ（1846-1908）は、ヤギッチの文献学的な概念よりも広いスラヴ学の概念を押し出した。それによれば、スラヴ学は、スラヴ人の「種族」的な一体性と、ラテン・ゲルマン世界とギリシア・スラヴ世界の相違に関する証拠を発見することを可能にする学問であった。⁶ しかし逆説的なことに、ブヂローヴィチは研究を進めるにつれて、スラヴ諸民族の間に存在する大きな相違を認識して、全スラヴ的統一の可能性を疑うようになった。だが彼は、スラヴ人が考え方を変えて相互に交流することによって互いに接近する必要があると唱えもした。⁷

概して言えば、ドブロフスキー的なスラヴ学は、何らかの意味でスラヴ世界の一体性あるいは共通性を暗黙の前提にして成立したものと思われる。ところが、研究が進めば進むほど、言語を除けばスラヴ世界の一体性あるいは共通性はそれほど存在しないということが明らかになってきたのではないだろうか？そして、スラヴ諸文化の関連性に注目して研究を進めるよりも、むしろ例えばプラハというトポスにおけるスラヴとドイツとユダヤの文化の関連性に注目して研究した方が成果が挙げられるように思えるのではないだろうか？

おわりに

既に 19 世紀にヤギッチが指摘したようなスラヴ学の分解傾向はその後さらに進み、1989 年の「東欧革命」以後のチェコスロヴァキアやユーゴスラヴィアといったスラヴ合同国家の崩壊も、その傾向に拍車をかけたのではないだろうか？ある種の運動やイデオロギーと結びついて勃興し発展してきたスラヴ学は、一方ではチェコ語研究やチェコ文学研究といった個々のスラヴ語やスラヴ文学などの個別的な研究と、他方ではもはやスラヴに限定しない比較文学などに移行してきたのではないだろうか？そして、ドブロフスキー的なスラヴ学から有効な学問として残るのは、もっぱらスラヴ比較言語学になったのではないだろうか？

スラヴ諸語に通じ、スラヴ全体を見渡しながら研究する、しかも言語学を基礎として文

⁵ Milan Kudělka, et. al., *Česká slavistika: Od počátku 60. let 19. století do roku 1918* (Praha: Historický ústav, 1997), pp. 127, 133.

⁶ *Ibid.*, p. 129.

⁷ Radomír Vlček, *Ruský panslavismus: Realita a fikce* (Praha: Historický ústav AV ČR, 2002), p. 78.

学その他の分野での研究も行うという、ドブロフスキー的なスタイルのスラヴ学は、ごく一部の超人的な学者にしかできないのではないだろうか? 今日多くのスラヴ語スラヴ文学研究者が実際にやっている研究は、チェコ語研究、ポーランド語研究、チェコ文学研究、ポーランド文学研究など個々の言語や文学の研究か、あるいは比較文学的研究ではないだろうか? そして、その研究がどれか一つのスラヴ語なりスラヴ文学なりに関係していれば、一応広い意味でのスラヴ学に含まれると見なさざるをえないのではないだろうか?

しかしながらまた、ヤギッチが鳴らした警鐘も、やはり念頭に置きながら、今後のスラヴ学のあり方も考えていく必要があるのではないだろうか? つまり、今日のスラヴ学は、個々のチェコ語研究、ポーランド語研究、あるいはチェコ文学研究、ポーランド文学研究などの、互いに関連のない研究の寄せ集めで良いのかどうか、あるいは「スラヴ学」という名称が示唆するような、より広いパースペクティブのもとで何らかの有機的関連を持つ研究を行うべきなのかどうか、もし后者であるとすれば、スラヴ比較言語学以外の文学研究などの分野で、いかなる研究をなしうるのかということも、やはり考えるべきではないだろうか?

ただし、スラヴ比較言語学においては、より多くのスラヴ諸語を学べば学ぶほど研究にとってはプラスになるであろうが、文学研究においてはスラヴ語のように数の多い言語をより多く学んでいっても必ずしもプラスにはならず、むしろ学ぶ言語の数を絞って、例えばチェコ語と、非スラヴ語であるドイツ語により習熟した方がプラスになるという、既にいわば実情的な事情から、言語研究と文学研究では前提からしてかなり異なるということも、考えざるをえないであろう。

ところで、日本におけるスラヴ学の礎を築いた木村彰一教授は、ドイツ語にもラテン語にも堪能で、教授にとってドブロフスキーは身近な存在であったに違いない。また、古代教会スラヴ語にも堪能で、スラヴの諸言語と諸文学の両方に造詣の深かった教授は、ドブロフスキー的な「正統な」スラヴ学の流れを汲む、現代における稀有な大学者の一人であったと言えるかもしれない。

1. *Pragische Fragmente hebräischer Handschriften*, Johann David Michaelis Orientalische und exegetische Bibliothek, XII. díl, Frankfurt nad Mohanem 1777, str. 101-111 (spolu s V. F. Durychem)
2. *Fragmentum Pragense evangelii S. Marci vulgo autographi*, Praha 1778; nové kritické vydání Bohumila Ryby v Praze 1953; základní část přeložena do češtiny ve výboru Kaňákově roku 1954
3. *Corrigenda in Bohemia docta Balbini iuxta editionem P. Raphaelis Ungar*, Praha 1779
4. *Böhmische Litteratur auf das Jahr 1779*, Praha 1779; obsáhlé ukázky přeloženy do češtiny ve výboru Jedličkově roku 1953
5. *Antwort auf die Revision der böhmischen Litteratur*, Praha 1780
6. *Böhmische und mährische Litteratur auf das Jahr 1180*, Praha 1780-1784; obsáhlé ukázky přeloženy do češtiny ve výboru Jedličkově roku 1953
7. *Prüfung der Gedanken über die Feldwirtschaften der Landgeistlichen*, Praha 1781
8. *Abhandlung über den Ursprung des Namens Tschech (Czech), Tschechen*, Praha a Vídeň 1782; přeloženo zkráceně zde mezi ukázkami
9. *Über die Einführung und Verbreitung der Buchdruckerkunst in Böhmen*, Abhandlungen einer Privatgesellschaft in Böhmen, svazek V., Praha 1782, str. 228-262; nové kritické vydání Mirjam Daňkové *O zavedení a rozšíření knihtisku v Čechách*, Praha 1954
10. *Über das Alter der böhmischen Bibelübersetzung*, Abhandlungen einer Privatgesellschaft in Böhmen, svazek V., Praha 1782, str. 300-322
11. *Recension und kritische Anmerkungen über des Reichstädter Herrn Dechants von Schönfeld am 25. May in der Skalka gehaltene lateinische Lobrede auf das Fest des heiligen Johann von Nepomuk*, Praha 1783; znovu otištěno v: F. M. Bartoš, Mladý Dobrovský o nepomucká legend, Praha 1940; Dobrovského jako autora spisu, vydaného anonymně (pod šifrou M. D.), odhaluje F. M. Bartoš, *Z počátků Josefa Dobrovského*, *Časopis českého muzea* 1921, str. 171-176
12. *De antiquis Hebraeorum characteribus*, Praha 1783; přeloženo do češtiny ve výboru Kaňákově roku 1954
13. Předmluvy k edici *Scriptores rerum Bohemicarum e bibliotheca ecclesiae metropolitanae Pragensis*, Praha I-1783, II-1784 (spolu s F. M. Pelclem)
14. *Historisch-kritische Untersuchung, woher die Slawen ihren Namen erhalten haben*,

Abhandlungen einer Privatgesellschaft in Böhmen, svazek VI., Praha 1784, str. 268-298

15. *Wie man die alten Urkunden, im Rücksicht auf verschiedene Zweige der vaterländischen Geschichte benützen soll, ein Versuch über den Břewniower Stiftungsbrief Boleslaws des Zweyten vom Jahre 993*, Abhandlungen der böhmischen Gesellschaft der Wissenschaften auf das Jahr 1785, II. oddíl, Praha 1786, str. 178-200
16. *Über die Begräbnissart der alten Slawen überhaupt und der Böhmen insbesondere, eine Abhandlung, veranlasst durch die bey Hořín im Jahre 1784 auf einer ehemaligen heydnischen Grabstätte aufgegrabene eisernen Geschirre*, Abhandlungen der böhmischen Gesellschaft der Wissenschaften auf das Jahr 1786, Praha a Drážďany 1786, str. 333-350
17. *Litterarisches Magazin von Böhmen und Mähren*, Praha 1786-1787; několik ukázek přeloženo ve výboru Jedličkově r. 1953, jiné v ukázkách zde
18. *De sacerdotum in Bohemia caelibatu narratio historica*, Praha 1787; přeloženo do češtiny ve výboru Kaňákově roku 1954
19. *Über eine Stelle im XIXten Briefe des heil. Bonifacius, die Slawen und ihre Sitten betrachtet*, Abhandlungen der böhmischen Gesellschaft der Wissenschaften auf das Jahr 1787, Praha a Drážďany 1788, II. oddíl, str. 156-160; přeloženo zde mezi ukázkami
20. *Über die ältesten Sitze der Slawen in Europa und ihre Verbreitung seit dem sechsten Jahrhundert, insbesondere über das Stammvolk der Mährer und ihre Geschichte bis zur Einsetzung des Herzog Rastislavu*, otištěno jako předmluva spisu Josefa Vratislava Monseho *Versuch einer kurzgefassten politischen Landesgeschichte des Markgrathums Mähren*, Olomouc 1788
21. *Geschichte der böhmischen Pikarden und Adamiten*, Abhandlungen der böhmischen Gesellschaft der Wissenschaften auf das Jahr 1788, IV. část, Praha a Drážďany 1789, str. 300-343
22. *Bemerkungen über die slavische Übersetzung des neuen Testaments*, Neue orientalische und exegetische Bibliothek, VII. svazek, Göttinky 1790, str. 155-157
23. *Über die Ergebenheit und Anhänglichkeit der slawischen Völker an das Erzhaus Oesterreich*, Praha 1791; přeloženo K. I. Thámem v Krameriových novinách 7. 1. 1792; tento překlad znovu vydal V. A. Francev pod titulem *Řeč Josefa Dobrovského proslovená dne 25. září 1791 v České učené společnosti*, Praha 1926
24. *Über den Ursprung und die Bildung der slawischen und insbesondere der böhmischen Sprache*, předmluva k práci Františka Jana Tomsy *Vollständiges Wörterbuch der böhmisch-, deutsch- und lateinischen Sprache*, Praha 1791
25. *Geschichte der böhmischen Sprache*, Neuere Abhandlungen der k. böhmischen Gesellschaft

- der Wissenschaften, I. svazek, Praha 1791, str. 311-364; rozšířeno a samostatně vydáno pod titulem: *Geschichte der böhmischen Sprache und Litteratur*, Praha 1792; kritické vydání připravil Benjamin Jedlička pod titulem *Dějiny České řeči a literatury v redakcích 1791, 1792 a 1818*, Praha 1936; český překlad verze z roku 1792 pořídil Benjamin Jedlička pod titulem *Dějiny české řeči a literatury*, Praha 1951
26. *Über das erste Datum zur slawischen Geschichte und Goographie*, Neuere Abhandlungen der k. böhmischen Gesellschaft der Wissenschaften, I. svazek, Praha 1791, str. 365-370
27. *Böhmische Prosodie*, otištěno v: F. M. Pelcl, *Grundsätze der böhmischen Grammatik*, Praha 1795, str. 209-246; II. vydání zkráceno a přepracováno roku 1798; do češtiny přeloženo ve výboru Jedličkově roku 1953
28. *Gelasius Dobner*, Neuere Abhandlungen der k. böhmischen Gesellschaft der Wissenschaften, svazek, Praha 1795, str. XVII-XXVI
29. *Otto Steinbach von Kranichstein*, tamtéž str. XXVI-XXVIII
30. *Ignatz von Born*, tamtéž str. XXIX-XXXII
31. *Joseph Wratislaw Edler von Monse*, tamtéž str. XXXII-XL
32. *Literarische Nachrichten von einer auf Veranlassung der k. böhm. Gesellschaft der Wissenssch. im J. 1792 unternommenen Reise nach Schweden*, Neuere Abhandlungen der k. böhm. Gesellschaft der Wissenschaften, II. svazek, Praha 1795, Diplomatisch-historisch-litterarischer Theil, str. 125-194; samostatně vydáno roku 1796 pod titulem *Litterarische Nachrichten... nach Schweden und Russland*, podstatná část přeložena do češtiny ve výboru Jedličkově roku 1953
33. *Vergleichung der russischen und böhmischen Sprache*, Praha 1796 (vydáno jako dodatek samostatného vydání předešlé práce; kritické vydání péčí Karla Horálka a Miroslava Heřmana ve sborníku „Rossica“, Praha 1953; základ přeložen ve výboru Jedličkově roku 1953
34. *Über den ersten Text der böhmischen Bibelübersetzung, nach den ältesten Handschriften derselben, besonders nach der Dresdner*, Neuere Abhandlungen der königlichen böhmischen Gesellschaft der Wissenschaften, III. svazek, Praha 1798, II. díl, str. 240-266
35. *Slovo Slavenicum, in specie Czechicum*, Praha 1799
36. *Die Bildsamkeit der slawischen Sprache*, Praha 1799; ukázky přeloženy do češtiny ve výboru Jedličkově roku 1953
37. *Neues Hilfsmittel, die russische Sprache leichter zu verstehen*, Praha 1799; roku 1812 druhé rozšířené vydání; kritické vydání ve sborníku „Rossica “ péčí Karla Horálka a Miroslava Heřmana roku 1953

38. *Entwurf eines Pflanzensystems nach Zahlen und Verhältnissen*, Praha 1802; kritické vydání připravil Miloš B. Volf pod titulem *Návrh soustavy rostlinné a rostlinopisný materiál z pozůstalosti*, Praha 1936
39. *Deutsch-böhmisches Wörterbuch*, I. díl, Praha 1802, II. díl, Praha 1821 (II. díl spolu s Antonínem Puchmajerem)
40. *Entwurf der böhmischen Deklinationen*, Praha 1803
41. *Bořiwoy's Taufe* (Kritische Versuche, die ältere böhmische Geschichte von späteren Erdichtungen zu reinigen, díl I.), Praha 1803; zařazeno v *Abhandlungen der königlichen böhmischen Gesellschaft der Wissenschaften*, Praha 1804
42. *Fortunat Durich*, tamtéž, Praha 1804
43. *F.M. Pelcl*, tamtéž, Praha 1804
44. *Slavín (Bothschaft aus Böhmen an alle slawischen Völker oder Beiträge zur Kenntniss der slawischen Literatur nach allen Mundarten)*, Praha 1806; II. vydání 1808
45. *Glagolitica* (doplňk k Slavínu), Praha 1807
46. *Ludmila und Drahomír (Kritische Versuche, die ältere böhmische Geschichte von späteren Erdichtungen zu reinigen, díl II.)*, Praha 1807, *Abhandlungen der königlichen böhmischen Gesellschaft der Wissenschaften*, Praha 1811
47. *Ausführliches Lehrgebäude der böhmischen Sprache*, Praha 1809; přepracováno vyšlo pod titulem *Lehrgebäude der böhmischen Sprache*, Praha 1819; kritické vydání péčí Miloše Weingarta a spolupracovníků pod titulem *Podrobná mluvnice jazyka Českého v redakcích z roku 1809 a 1819*, Praha 1940
48. *Wie soll Nestors Chronik aus so mancherlei Recensionen des Textes rein hergestellt werden ?*, úvod ke knize Josefa Müllera *Altrussische Chronik nach Nestor*; Berlin 1812
49. *Entwurf zu einem allgemeinen Etymologikon der slawischen Sprachen*, Praha 1813, zařazeno v *Abhandlungen der königlichen böhmischen Gesellschaft der Wissenschaften*, Praha 1814
50. *Slovanka* (zur Kenntnis der alten und neuen slawischen Literatur, der Sprachkunde nach allen Mundarten, der Geschichte und Alterthümer), I. díl, Praha 1814, II. díl, Praha 1815
51. *Beiträge zur Geschichte des Kelches in Böhmen*, Praha 1817, zařazeno v *Abhandlungen der königlichen böhmischen Gesellschaft der Wissenschaften*, Praha 1818
52. *Geschichte der böhmischen Sprache und ältern Literatur; ganz umbearbeitete Ausgabe*, Praha 1818; kritické vydání připravil Benjamin Jedlička v edici *Dějiny české řeči a literatury v redakcích 1791, 1792 a 1818*, Praha 1936
53. *Wenzel und Boleslaw (Kritische Versuche, die ältere Geschichte von spätem Erdichtungen zu reinigen, III. část)*, Praha 1819; zařazeno v *Abhandlungen der königlichen böhmischen*

Gesellschaft der Wissenschaften, Praha 1820

54. *Literatur der russischen Sprachlehren*, předmluva ke knize A. J. Puchmajera, *Lehrgebäude der russischen Sprache*, Praha 1820; kritické vydání připravili Karel Horálek a Miroslav Heřman ve sborníku „*Rossica*“, Praha 1953
55. *Institutiones linguae Slavae dialecti veteris*, Vídeň 1822
56. *Cyrill und Method, der Slawen Apostel, ein historisch-kritischer Versuch*, Praha 1823; zařazeno v *Abhandlungen der königlichen böhmischen Gesellschaft der Wissenschaften*, Praha 1824; kritické vydání připravil Josef Vajs pod titulem *Cyril a Metod, apoštolové slovanští*, Praha 1948; podstatná část přeložena do češtiny ve výboru Kaňákové roku 1954
57. *Literarischer Betrug*, *Archiv für Geschichte, Statistik, Literatur und Kunst*, XV. ročník, Vídeň 1824, číslo 46, 16. 4. 1824, str. 260; přeloženo do češtiny ve výboru Jedličkově roku 1953; znovu přeloženo zde v ukázkách
58. *Vorläufige Antwort auf des Herrn W. S. Ausfälle im Archive Nr. 64 vom 28. May 1824*, *Archiv für Geschichte, Statistik, Literatur und Kunst*, XV. ročník, Vídeň 1824, číslo 79, 2. 7. 1824, str. 435-436; přeloženo do češtiny ve výboru Jedličkově roku 1953; výňatky přeloženy znovu zde
59. *Prawda ruská von J. B. Rakowiecki, Jahrbücher der Literatur*, svazek XXVII, Vídeň 1824, str. 88-119; výňatky přeloženy do češtiny ve výboru Jedličkově roku 1953
60. *Slovar akademii rosijskoj*, *Jahrbücher der Literatur* 1825; kritické vydání připravili Karel Horálek a Miroslav Heřman ve sborníku „*Rossica*“, Praha 1953
61. *Über die ehemaligen Abbildungen böhmischer Regenten und ihre Inschriften in der Prager königlichen Burg vor dem Brande im Jahre 1541*, Praha 1825, zařazeno v *Abhandlungen der königlichen böhmischen Gesellschaft der Wissenschaften*, Praha 1827
62. *Mährische Legende von Cyrill und Methode* Praha 1826; zařazeno tamtéž
63. Předmluva k edici *Historia de expeditione Friderici imperatoris*, Praha 1827
64. Recenze Šafaříkových *Geschichte der slawischen Sprache und Literatur nach allen Mundarten*, *Jahrbücher der Literatur*, XXXVII. svazek, Vídeň 1827, str. 1-28
65. Recenze Jungmannovy *Historie literatury české*, *Jahrbücher der Literatur*, XXXVII. svazek, Vídeň 1827, str. 28-41; přeloženo do češtiny ve výboru Jedličkově roku 1953
66. *Was gewinnt die böhmische Geschichte durch die Monumenta Germaniae historica?*, *Monatschrift der Gesellschaft des vaterländischen Museums in Böhmen*, Praha 1827, leden, str. 53-61
67. *Bemerkungen über das alte mährische Reich*, tamtéž, únor, str. 53-64
68. *Über Beneš Krabice von Waitmil*, tamtéž, duben, str. 56-57
69. *Über eine unverständliche Stelle in der Chronik des ersten böhmischen Geschichtsschreibers*

Cosmas, tamtéž, červen, str. 48-49

70. *Bemerkungen eines Böhmen über die Verwandtschaft der slawischen und nordischen Mythologie*, tamtéž, srpen, str. 59-60
71. *An welchem Tage ward der Grundstein bei Gründung der Neustadt Prag gelegt?*, tamtéž, prosinec, str. 43-46
72. *Slovou-li Slované od slávy, čili od slova?*, Časopis společnosti vlastenského muzeum v Čechách, Praha 1827, díl I., str. 80-85; znovu otištěno ve výboru Jedličkově v Praze 1953
73. *Plavci u Dalimila jaký to národ?*, tamtéž, díl I., str. 122—123; znovu otištěno ve výboru Jedličkově v Praze 1953
74. *Čech nebo Čechové odkud tak slují?*, tamtéž, díl II., str. 3-9; znovu otištěno ve výboru Jedličkově v Praze 1953
75. *Erläuternde Bemerkungen über die Geschichte K. Ottokars II.*, *Monatschrift der Gesellschaft des vaterländischen Museums in Böhmen*, Praha 1828, leden, str. 41-70
76. *Stellen aus der Geschichte der Hohenstaufen von E von Raumer, die sich auf Böhmen beziehen, mit einigen Bemerkungen*, tamtéž, květen, str. 404-414, červenec, str. 29-43
77. *Rozličnosti v exemplářích Diadochu Barth. Paprockého*, Časopis společnosti vlastenského muzeum v Čechách, Praha 1828, díl II., str. 119-123; znovu otištěno ve výboru Jedličkově v Praze 1953
78. *Vzájemné dopisy Václava Hanky a Josefa Dobrovského*, vydal A. J. Vrřátko, Časopis národního muzea 1870, str. 217-246, 311-341
79. *Briefwechsel zwischen Dobrowsky und Kopitar (1808-1828)*, vydal V. Jagič, Berlín 1885
80. *Vzájemné dopisy Josefa Dobrovského a Fortunata Duricha z let 1778-1800*, vydal Adolf Patera, Praha 1895
81. *Neue Briefe von Dobrowsky, Kopitar und anderen Süd- und Westslaven*, vydal V. Jagič, Berlín 1897
82. *Vzájemné dopisy Josefa Dobrovského a Jiřího Samuela Bandtkeho z let 1810-1827*, vydal V. A. Francev, Praha 1906
83. *Vzájemné dopisy Josefa Dobrovského a Josefa Valentina Zlobického z let 1781-1807*, vydal Adolf Patera, Praha 1908
84. *Vzájemné listy Josefa Dobrovského a Jiřího Ribaye z let 1783-1810*, vydal Adolf Patera, Praha 1913
85. *Kritická rozprava o legendě prokopské* (Kritische Versuche, die ältere böhmische Geschichte von spätem Erdichtungen zu reinigen, díl IV.), z pozůstalosti vydal V. Flajšhans, Praha 1929
86. *Autobiografie*, „Bratislava“ III-1929, str. 361-372 (dva vlastní Dobrovského životopisy z roku

1824)

87. *Dopisy Josefa Dobrovského s B. A. Veršauerem a V. Krčmou - Z rodinných dopisů Josefa Dobrovského*, vydali Josef Volf a Josef Páta, Praha 1937
88. *Dopisy Josefa Dobrovského s Augustinem Helfertem*, vydali Josef Volf a F. M. Bartoš, Praha 1941
89. *Dopisy Josefa Dobrovského s Janem Petrem Cerronim*, vydal F. M. Bartoš, Praha 1948
90. *Přednášky o praktické stránce v křesťanském náboženství*, vydali Josef Volf, Miloš B. Volf a Josef Vraštil, Praha 1948 (přednášky z olomouckého generálního semináře z let 1787-1790); do češtiny přeloženy ve výboru Kaňákové roku 1954
91. *Výbor z díla*, vybral a přeložil Benjamin Jedlička, Praha 1953
92. *Z náboženského odkazu Josefa Dobrovského*, vybral a přeložil Miloslav Kaňák s kolektivem spolupracovníků, Praha 1954
93. *Der Briefwechsel zwischen Josef Dobrovský und Karl Gottlob von Anton*, vydali Miloslav Krbec a Věra Michálková, Berlín 1959
94. *Soupis korespondence Josefa Dobrovského*, sestavil Miloslav Krbec (obsahuje soupis i četné další, rozptýleně publikované korespondence Josefa Dobrovského), Sborník Národního muzea v Praze, Praha 1959, str. 45-96

このほか、下記の新聞雑誌に多くの書評を掲載している。

Prager Zeitung (od roku 1778)

Allgemeine Literaturzeitung (Jena, od 1804 Halle)

Annalen der österreichischen Literatur (Víděň 1802-1809)

Jenaer allgemeine Literaturzeitung (Jena od 1813)

Wiener allgemeine Literaturzeitung (Víděň 1813-1816)

Jahrbücher der Literatur (Víděň 1818-1828)

Archiv für Geschichte, Statistik, Literatur und Kunst (1820-1828)

Archiv der Gesellschaft für ältere deutsche Geschichtskunde